震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

神社界

無料で結婚式

●神戸市中央区の北野天満宮（佐藤直邦宮司）では、兵庫県南部地震の震災で結婚式を諦めた人々に対して、無料で結婚式を執り行なう奉仕活動を行なっている。中央区では地震による被害が大きく、ホテルなどの結婚式場、披露宴の施設も休業状態のところが多いため、結婚式を延期するカップルが多いといわれる。佐藤宮司は「地震で結婚式を延期したり、取りやめたりした人達に、少しでも希望を持ってもらいたい」との気持から、二月いっぱい無料の結婚式を受け付けることにした。同天満宮も地震により被害を受けたが、震災後は社務所を地域の人々の宿泊所として開放、地元の人々と信頼の絆を深めている。式は「祝詞を奏上、三三九度と式だけだけれど、こういう時だからこそ緊張感の中で、思い出に残る式があげられる」と語る佐藤宮司のもとには問い合わせが多く、十二日には最初の式が挙げられることになっている。

大震災を記録

●西宮神社（吉井良隆宮司、西宮市社家町）では一月二十二、二月四日に結婚式が行なわれ、二組が新しい生活をスタートさせた。これは地震前から日取りが決まっていた式が、本人らの希望により、震災という困難を乗り越えて挙行されたもので、無事だった拝殿、本殿前で感動的な三三九度が行なわれた

▽甚大な被害を受けた西宮神社境内の吉井貞俊権宮司は、被害の様子を後世に残しておくことを急務と感じ、被災後の境内を絵図面に描いた。新幹線などの車窓からの“流れ絵図”で名高い吉井権宮司の作品とあって、思い立った十九日に筆をとって一気に書き上げた。「平成地難図」と名付けられた絵は、参集殿、本・拝殿以外は殆ど損壊しているという痛ましい絵となったが、後世に地震のすさまじさを伝える記録となった

▽西宮市の廣田神社（中山隆宮司）では、倒れた祭舎の解体作業がこのほど終了、新しい祭舎は三月の例祭前に完成させたいとしている

▽生田神社（神戸市中央区、加藤隆久宮司）は現在、楼門と大鳥居の修復に力を尽くしており、三月末までにこれらの作業を終えた後に、倒壊した拝殿が復旧される。

天台

定宗は二十五、二十六日

●天台寺門宗

▽兵庫県南部地震で被害を受けた人たちにと総本山園城寺（福家俊明長吏）と総本山関係団体は計約二百万円の義援金をNHKへ寄託した。内訳は園城寺から百万円、三井寺婦人会が三十万円、三井煎茶道壺中会と園城寺職員は各五万円、そして、福家長吏と小林宗務総長ら一山住職、三井寺婦人会らが一月二十日、大津市内で行なった托鉢の約六十万円。このほか、総本山境内には金堂、観音堂、仁王門に義援金箱を設置して参詣者に善意を呼びかけて

いる。福家長吏は「義援金箱は五月末日まで設ける。宗門の寺に被害はなかったが、今後も続けて支援していきたい」と話している。

浅草寺BSが被災地へ

●**聖観音宗** 総本山浅草寺（壬生台舜貫首）で育成するボーイスカウト台東第7団（大森和潮団委員長）は、兵庫県南部地震のボランティアで団員二人の派遣を決め、ボーイスカウト隊隊長の吉川眞浩氏（三三）＝一山実相院住職＝と同副長の山沢朋弘氏（二四）が四日早朝、被災地に向けて出発した。二人は十二日まで、避難所の神戸市兵庫区・門口公園で救援活動に従事する。今回の派遣は、兵庫県救護対策現地本部およびボーイスカウト兵庫連盟の要請を受けたもので、台東第7団では第二次の派遣も検討中

▽震災の「義援バザー」(仲見世商店振興会主催)が十一日、浅草寺境内で開かれる。ここでは台東第7団の高校生らがボランティアで運営を手伝う。

臨黄

“動中の工夫の好期”に

●**妙心寺派** 兵庫県南部地震で被災した祥福寺専門道場（河野太通師家）だが、既報の通り建物の被害は比較的軽微で、雲衲二人が軽傷を負っただけで済んだ。同僧堂から届いた挨拶状によると、「復旧に向かっての作務、近郊の被災寺院や檀信徒各家への作務奉仕、お見舞い訪問など、まさに動中の工夫の好期と心得て、一丸となって復旧に邁進」している、とのこと

▽激震地に位置しているわりには軽微であったとはいえ、祥福寺でも山門が倒壊した他、庫裡・本堂・書院等で屋根瓦がずり落ち、構造材の歪み、壁の落下や裂傷などがみられ、境内、墓園でも石碑、灯籠が数多く転倒した。盤珪禅師三百年遠諱の記念事業で増改築された部分も壁面に多少の裂傷が生じ、奥書院が僅かに傾いた。しかし河野師家の指示のもと専門家とも相談して応急処置に当たり、「道場としての面目を保持し、修道生活に何ら支障を来すことのない状態」という。塔中の明鑑寺では構造の歪みによる壁の剥落、裂傷、屋根瓦のズレなどかなりの被害があったが、応急処置を施し、居住、利用には支障がない状況だ

▽祥福寺には一時、被災者の遺体も安置されていたが、現在、京都大学地震研のスタッフのため宿舎を提供している。会下などからの寄せられた救援物資はリヤカーで避難所や近隣家庭に運んで分配、さらに雲衲が近隣寺院、家庭へ作務奉仕に出向くなど、震災後まもない時期から被災者支援のために動いた。非常事態への対応ぶりはさすがに際立ったものだった

▽制間に入り、この五日からは“ぜんざい”の炊き出しも始めた。初日には二百食分を寺でつくり、夕方、避難所に充てられている小学校に運んだ。避難所生活をおくっている人だけでなく、自衛隊の給水車が来ていて給水に立ち寄った人達も多く、もってきた“ぜんざい”はあっという間に全部なくなった、という。たいへん好評なため、配給先を変えてしばらく続ける予定だ

学界

峰島教授囲んで新年会

●早稲田大学教授で浄土宗広度院住職の峰島旭雄氏（比較思想学）を囲む恒例の新年会「峰友会」が一月十九日夕、東京都港区・増上寺の景光殿で開かれ、教授の教え子や同僚、友人ら二百人が集った。はじめに、十七日に発生した兵庫県南部地震の犠牲者を悼んで全員で黙祷した。このあと峰島氏が「峰友会はゼミの学生ら私の研究の手助け

をしてくれた人たちに感謝の意を表わそうと始めたものだが、年々、規模が大きくなっていった。自分より年上の人は呼ばないなどの原則があったが、それも崩れてしまいました」と、自由な雰囲気を持続しながら今年で十五回を数える会の由来を紹介。続いて乾杯の発声を行なった中村元東方学院長は、人災との指摘もある今回の「とんでもない」地震災害に触れ、「今日までの日本は機械文明にあぐらをかいて、心が油断していたと思う。それを乗り切るには人々の温かい心と心の触れあいが必要です」と述べ、各層の人々が交流する峰友会の貴重さを強調した。また、名古屋芸大講師の井上貴子さんら三人によるインド民謡も披露され、会場は華やいだ雰囲気に**＝写真【写真は省略】**。峰島教授は宴席を回って、参会者一人ひとりと親しく新年の言葉を交わしていた。

法華

義援金は五億円を目標

●**日蓮宗** 「兵庫県南部地震日蓮宗救援対策本部」の副本部長を務める加賀美泰全庶務部長は、全国七四管区の宗務所長を集めて一日に開かれた「立教開宗七百五十年慶讃事業懇談会」の席上、このたびの地震災害の義援金は五億円を目標に勧募したいと発表した

▽千葉県西部宗務所（石野日英所長）では、JR茂原駅とJR木更津駅の駅頭で街頭募金を行ない、集まった百十万円ほどを宗務院の対策本部に送ったと

▽総本山身延山久遠寺（岩間日勇法主）では、先に派遣した救援第一団（一月二十三日・二十四日）に続き、今月二日から五日にかけて第二団を現地に送り、災害地を見舞った。第二団には上田本昌庶務部長をはじめ、中里悠光、佐野智尚両氏ら八人、それに身延山病院の関戸清貴院長、看護婦三人、薬局長一人の五人が新しく参加し、大阪市中央区・雲雷寺（伊丹栄彰住職＝身延山・祖山常置会議員）を拠点に、大阪本願人会の近藤逞夫会長ら三人も加わって、神戸市長田区の野田高校体育館に避難している被災者三百五十人への医療救援活動を実施した。この体育館には、若いボランティアの看護婦が一人いただけだったので、身延山の医療団は大いに喜ばれたというが、特にインフルエンザが流行していて、そのほか高血圧、胃腸障害、ケガなどの患者が多かったという。この間、上田庶務部長らは、神戸市兵庫区、同長田区、さらに尼崎市、伊丹市、宝塚市、西宮市などの近郊各都市にまで足を延ばして、全壊あるいは半壊などの被害に遭った十六カ寺を見舞い、水やガスの不便な寺院には救援物資を届けた。また神戸市長田区の泰信寺では、夏井龍耀住職が地震後の過労で急逝したため、ちょうど慰問にかけつけた上田庶務部長の導師で仮通夜を営むという出来事もあったと。

浄土

共済審査会の審査を経て

▽浄土宗では、火災、天災などの災害に対し、給付金が給付される浄土宗独自の「浄土宗共済会」を設けているが、今回の地震災害に適用される天災地変による被害の場合、最高二百万円となっている。各教区を通じて共済会に申請書を提出し、共済審査会（会長＝成田有恒宗務総長）の審査を経て給付されることに。今回の兵庫県南部地震では被災寺院は相当数に上っているが、桑原法道財務局長は「給付は共済審査会の審査が行なわれないとどの程度の給付額になるか分からないが、これまでの調査から見ると、プールされている資金がショートするということはないだろう」との見通しを話している。

光明寺・神奈川教区互礼会

▽一月二十七日、神奈川県鎌倉市材木座の大本山光明寺（戸松啓真法主）を会場に、大本山光明寺と神奈川教区合同の新年互礼会が開催され、昨年一月に発足した神奈川教区の檀信徒の集いである「かながわ浄土の会」の各組幹部二十七人を含めた約百人が参加した。光明寺・神奈川教区合同新年互礼会は、森爽海教区長就任直後の昨年度から光明寺と教区役員だけの互礼会を拡大して教区の各種団体役員を加えた。即ち、浄青、保育連盟、寺庭婦人会、児童教化連盟、雅楽会、吉水講のほか、新設の「かながわ浄土の会」の代表が出席。当日は午前十一時から、本堂で戸松啓真法主の導師のもと、北邨謙順執事長、森爽海神奈川教区長が協導師をつとめて回願が行なわれた後、兵庫県南部地震の犠牲者の冥福を祈願した。戸松法主は法要後、「被災者の皆さんには誠に気の毒なことであり、一日も早く復興すべく奮い立って頂きたい。私共も今年一年、心を新たにして、被災者の皆さんの事を念頭に置いて精進したい」と挨拶を述べた。書院に会場を移して催された互礼会の席上、森神奈川教区長が「神奈川教区として救援のお願いをしたい。一宗からも依頼があったが、それは宗内の被災寺院への救援金である。教区で集める義援金は、一般の被災者に対して送らせていただきます」と挨拶した（目標額は三百万円）。また光明寺の北邨執事長は地震の被災者の救援について、「兵庫教区などが壊滅的な打撃を受けている中であって、光明寺としても乏しい財政の中ではあるが、被災者の状況をしのいで募金を送らせていただきたい」と述べ、さらに「今年は鎌倉光明寺の十夜法要が始まって以来、ちょうど八百年目に相当します。十夜法要が始められた時期も決して平静な時代ではなく、戦国時代という戦乱のさ中でありました。時の天皇様の御心として、何としても仏の光によって平和で安穏な世の中をつくりたい、それには南無阿弥陀仏の念仏によるしかない、との思し召しによって十夜法要が始まったことを肝に銘じて、我々もますます心を新たにしておつとめ申し上げたい」と挨拶した。来賓の挨拶では大本山増上寺の野呂幸進執事長が、兵庫県南部地震について「本山としても義援金その他できるだけのことをさせていただきたい」と述べた。また席上、次の表彰が行なわれた（敬称略）。僧階叙任＝正僧正・石川実禅（中郡・大福寺）、僧正・吉岡了泰（京浜・東明寺）、教階叙任＝正司教・野中純道（鎌倉・良心寺）、正司教・北邨謙順（小田原・西念寺）、学階授与＝已講・宮林昭彦（京浜・大光院）、講師＝金子寛哉（港北・善教寺）、住職五十年＝野呂幸進（京浜・教案寺）、近藤真隆（鎌倉・覚栄寺）、小松崎成彦（三浦・東漸寺）、住職三十年＝大橋定康（港北・大蓮寺）、竹石友威（小田原・三宝寺）、住職任命＝吉田健一（中郡・浄信寺）、小川豊彰（港南・無量寺）、大室了恂（中郡・三福寺）、石川覚順（港南・正覚寺）、安藤昌信（高座・蓮光寺）。清興として、シンガーソングライターでロックバンド「SHOGUN」のメンバーであるケーシー・ランキン氏による「トーク&ソング“平和への道”」が披露され、好評を博した。ケーシー・ランキン氏はアメリカ合衆国カンザス州生まれ。ベトナム戦争の悲惨な経験をもとに、人間主義・平和主義をモットーとする数々の作曲を手がけていることで知られ、昨年、全米で発売された「ザ・リアリティ・オブ・ドリームズ」の中の「ハズ・エブリワン・ゴーン・ブラインド」は国連の国際戦争平和財団の九五年度のテーマ曲に選ばれたほか、日本でも全日空、アサヒビール、キリンメッツ、トヨタ「エステマ」、キャノンF1カメラ等のCFミュージックを作曲している。ちなみに彼は元毎日新聞記者で神奈川教区教化団理事の一人である古林肇道氏（小田原市・城源寺住職）の友人であるという。正午から開山堂で開催された祝宴では、ビンゴゲーム、念仏体操など楽しい企画もあり、和気藹々とした雰囲気にも包まれた。森教区長は、隣り合わせたケーシー・ランキン氏に「世界各地で、宗教の名のもとに、戦争が起きていることは悲しいことですね」と語りかけ、ケーシー・ランキン氏も「全く同感です。仏教はそういうことがないから素晴らしいですね」と語っていた＝写真

【写真は省略】

真言

各地で救援活動実施

●高野山 兵庫県南部地震（阪神大震災）の被災者への救援ボランティアに宗務所の若手職員らの積極的な活動が続けられ、注目されている。一月三十日、兵庫県但馬支所の住職、教師ら六人がボランティアで西宮の小学校に入った。三年前、不慮の火災で庫裡を焼失し、昨年、新築したばかりの兵庫県養父郡八鹿町石原日光院の森田光順住職もボランティアの一行に加わった。森田住職は「五十六歳の私が最年長でしたが、まだまだ体力、気力はありま

す。とにかく足を運んで現場へ出かけようと西宮市に来ましたが、実に驚きました。涙がでる惨状でした。小学校に避難している方々へ、物資や水を運んだり、仕事は山とありました。何日も留まってご奉させて頂きたかったのですが、今度は、但馬地方は昭和五十九年以来の大雪で、こちらも雪との戦いになるため帰ってきました」と▽九州では各地域の青年教師会が中心になり、ボランティアや救援物資の援助などで活動している。また、福岡宗務支所（藤本弘文支所長、事務局＝福岡県田川郡大任町今任原二五九〇・十輪院内）では現在、義援金勧募活動を中心に活動、今後の対応について「大阪（太融寺に設置された災害救援本部のこと）と連絡をとりながらボランティアなどの対策を考えている」としている。高野山真言宗の寺院も属している真言宗各派連合真和会は迅速な対応を見せ、震災のあった翌々日（一月十九日）に福岡市内で救援托鉢を実施し、寄せられた浄財を西日本新聞民生事業団に寄託した。

震災の釈迦院で節分行事

▽釈迦院（大阪市港区築港）は三日、節分行事を執り行なった。同寺は今回の地震により、本堂が倒壊寸前という大きな被害を出したが、例年より縮小しながらも何とか終わることができた。地震当日は大阪市内でも特に揺れが激しかったようで、近くは液状化現象まで見られたという。現在は本堂に支えをしている状態で、節分当日も例年の舞台設置も取りやめ、鬼払いの豆撒きも手配りに切り替えた。また不動明王をまつた岩窟形式の建物は無事だったので、午前六時、十時、午後零時、四時にその前で護摩を焚いて祈願を行なった。

義援金一千万円を委託

●**智山派** 兵庫県南部地震に対し、義援金の募金を各教区に呼びかけていたが、これまでに集まった義援金一千万円を第一回分として、三日、京都新聞の救援窓口の上村正剛宗務総長が持参した。財務部の田中弘明経理課長は、「これからも募金活動を続けていきます。合計二千万円ぐらひは、皆様から協力いただけていると思っています」と語っていた。また、救援に役立ててほしい」と、連日、地方教区から救援物資が宗務庁へ届けられており、まとまった時点で便を設けて現地へ発送している

▽宗務庁の若手職員で結成する智興会では、一月二十八日から三十一日までの四日間、高野山真言宗の救援対策の西宮支部となっている高野山真言宗東光寺（松田真睿住職、西宮市門戸西町二ノ二六）を拠点にして被災地のボランティア活動を実施。三人が泊まり込んだほか、一、二人が日帰りで参加して展開された。同寺には全国から多くの各宗派のボランティアが集まり、同寺を拠点に、体育館、学校など各避難所に出かけ、一般のボランティアと一緒に、物資の運搬、トイレの清掃、炊き出しの手伝いなどを行なったようだ。四日間泊まり込みでボランティア活動をしてきた教務課の池田貴能氏は、「時間の経過に従って、被災者に疲れがみられた。物資も、食事や衣類についてはかなり揃ってきてはいるものの、避難所によって差があるのも確かだ。相変わらず温かいものが食べたいという声が多い。連日冷たいおにぎりばかりではおいしくないだろうと、火が使用できる避難所なら、雑炊やチャーハンに作り替えたりして出していた。しかし、場所によっては火災防止のため火の使用が禁止されているところもあった。その他、衛生的にも問題が多いようだ」と語っていた

▽山内の開山堂、大師堂など諸堂も地震の被害で損傷が見られるが、応急の修理が行なわれており、取りあえず約六百万円の修理費がかかりそうだ。

長野南部の平福寺で慰霊

▽長野南部教区長の小林聖仁平福寺住職（長野県岡谷市長地三三二六）は、「このたびの兵庫県南部地震の被害者に心からお見舞い申し上げます。中外日報紙上で連日その惨状を知らされ胸が痛みます。何をどうすればよいか、

とりあえず震災による死者の慰霊、負傷者平癒、被災地早期復興を懸命に祈っております。そして今後、できる限りつくしてまいります」と語っている

▽平福寺では、一月二十九日午後二時から兵庫県南部地震の被災死者慰霊と早期復興を祈願する特別法要を厳修した。法要には同寺の檀家、市民約百人が参列した。法要は檀家総代会が中心になって営まれ、高木基補檀徒総代が、「亡くなった方一人々々の気持を思うと心が締めつけられる」と追悼の言葉を送った。小林住職の読経に続いて仏教婦人会のご詠歌も奉詠され、哀悼の誠が捧げられ、法要後、小林住職が「いかせ、いのち」と題して「二度とない人生だから、きょうの無事に感謝しながら、日々を大切に尊いいのちを生かしていこう」と法話を行なった。また、会場には義援金の募金箱も置かれた。同寺境内には一週間ほど前から募金箱が置かれてあり、この日を含めて総額四十六万余円の募金が集まった。義援金は岡谷市と下諏訪町の各救援対策本部に届けられ、被災地へ送られた

▽なお、平福寺の責任役員会は、小林住職が晋山してから二十周年を迎え、今回、同住職が教区長に就任したのを祝って祝賀会を計画していたが、地震で多数の死者や負傷者が出たことから、小林住職は総代会の席上、「この非常事態の中では、僧侶の立場として祝賀会を開催する心境になれません。檀家の皆さんの温かい気持だけを受けておきたい」と辞退した。中止によって新たに慰霊と被災地の早期復興を祈る法要になったもの。

真宗

息の長い支援に向け

●**本願寺派** 一月十七日早朝に発生した兵庫県南部地震により大きな被害を受けた兵庫教区（土基謙教務所長）と大阪教区（吉川孝臣教務所長）の被災寺院の復興救援策を協議する第二百四十一回臨時宗会（北條成之議長）が、六日、本山宗務所大会議室で開催された。「事は急を要する」と会期一日で開催された今臨宗では、宗派として被災寺院の復興を財政的に支援するために平成九年度まで四会計年度にわたる復興対策収支計画を組み、一口十万円の直属寺院、一般寺院への「寺院協力金」などを積立金とする十五億円規模の「災害対策金庫」を設置し、この金庫の被災寺院への貸し付け方法など具体的な方策については宗会議員、兵庫、大阪両教区の教務所長ら教区役職者らを委員とする「阪神大震災対策委員会」（委員長＝篁昭観総務）において検討することなどの今後の方策の“基本線”が決定した

▽災害対策金庫は毎年増資することが規定されており、宗派としては収支計画の四会計年度を一応の目処とはするものの、被災寺院一カ寺一カ寺が各々において復興の軌道に乗るまで息の長い支援の手を差し伸べてゆく方針。教化伝道の拠点を失い、また、寺院活動の基盤とも言える門信徒も多数が被災するなどして今後の展望すら見えない状態にあった被災寺院にも、この復興救援方針の決定で将来に微かではあるが“希望の灯火”が見えるようになったと言えるのではないだろうか

▽しかし、今回の臨宗で決定したのはあくまでも復興支援計画のアウトラインに過ぎない。具体的な内容については「阪神大震災対策委員会」の協議等を通じて煮つめていくことになっており、金庫の運用や「協力金」の拠出の仕方など今後の課題も多いのが実情である。各教区では本山からの指導に従い、既に教区内の寺院や門信徒へ義援金を募っているが、ここへまた新たに「一口十万円以上」の「協力金」を募るとなると寺院によっては大きな負担を強いる寺院も出てくる

▽また、既に多額の義援金を納めている寺院にはこの義援金の一部を「協力金」に振り替えるよう望む所も出てくるのが想定されるが、その場合に義援金と「協力金」の線引きをどうするかの問題もある。さらに、災害対策金庫からの貸し出しについては損害保険の専門家の査定に基づき行なわれるが、現在自己申告に基づいて把握されている全壊、半壊などの被災状況とズレが生じることは必至で、査定を受けた被災者側に不満が残る恐れもあり、全ての被災寺院に公平感を抱かせるのは至難の業と言ってよいだろう

▽「阪神大震災対策委員会」では、九、十の両日に全委員が集まり第一回の委員会を開催。この後、十四日に第二回、十八日に第三回の委員会を立て続けに開催し、こうした様々な問題点や既存法規との整合性の詰めをある程度

行なった上で、二十一日からの定期宗会までに提案を行なうことにしている。臨宗の閉会に当たり、松村了昌総長は「この問題はきたる定宗とも連動していることでもあるので」と述べ、定宗においても引き続き復興支援策についての、さらに突っ込んだ協議、提案を行なうことになるとの考えを示しており、復興対策の輪郭が明確になるまでにはまだ時間が必要なようだ。

最期まで宗門のことを

▽兵庫県南部地震で西宮市の自坊、西福寺の庫裡、客殿などが崩壊、実父の豊原大潤元総長（八六）、夫人の幸子さん（六二）、一人娘の真理さん（二八）の家族三人を一度に失うという不幸に見舞われた豊原大成総務（六四）が、第二百四十一回臨時宗会（北條成之議長）において被災寺院の住職として宗門関係者らの今回の支援活動についてのお礼を述べるとともに、今後より一層の支援を要請する挨拶を行なった

▽同総務は「時を移さず連日にわたり（救援活動に）奔走して頂き、また、遠く海外からもお見舞いを頂いたことには感謝のほかなく、僭越ながら被災寺院を代表致しまして厚くお礼申し上げます」と全宗門挙げての救援態勢に深甚の謝意を表明。しかし、被災寺院の中には約五十カ寺もの全壊、全焼の寺院があり、門信徒の多くも被災し多くの被災寺院では復興の目処さえ立たない寺院が多いことに言及。「これら寺院は正しく存亡の淵に立っています。この厳しい現実を直視して今後も物心両面にわたる援助の手を差し伸べて頂きますよう伏してお願い致します」と、被災地と痛みを分かち合った息の長い援助を依頼した

▽この後、同総務は自坊の被災状況についてふれ、被災翌日から松村了昌総長、北條成之議長、堀静男宗会議員をはじめ多数の宗門関係者が遠近各地から見舞いや弔問、励ましに訪れたこと、大谷光照・嬉子前門夫妻から御香料を賜ったこと、そして、二十七日には大潤元総長の宗門葬が営まれること等々を挙げつつ、「この度ほど『親切』という言葉の重みを味わったことはありません」と深謝

▽続いて、「父は宗会議員在職四十年。この間、前門様、当門様はもとより宗門各方面の方々のご指導ご鞭撻により十二年余にわたり総長職を務めさせて頂くことができました」と亡父大潤氏の思い出へと話を進め、「父は自坊以上に宗門を愛していたようで所要で半日帰坊した十六日夕刻、私への最期の言葉も...最期の言葉も...『ご本山は上手くいっているか。体に気をつけるのだよ』というものでありました」と涙に詰まりながら親子で交わされた短い“最後の会話”を紹介して、亡父の終生変わらぬ宗門愛の一端を披瀝した

▽今回の大震災では五千二百人余りの尊い人命が僅か三十秒間の地震を原因として犠牲となり、本派の寺族も豊原総務の家族三人を含め十一人が犠牲となっている。本堂など建物の被害もさることながら「大切な肉親を一瞬にして失ったこれらの遺族の方々的心中を察すると言葉もない」（松村総長）。「『嘆くでない。悲しむでない』と釈迦が臨終に際して弟子の阿難に与えた言葉を胸に、これからは寺院の復興、ご法義繁盛に微力を尽くしたい。それがこの度の皆様のご厚情に対するせめてものお礼の印であります」－豊原総務はこう言って被災住職らの復興への決意を代弁したが、こうした被災寺院住職らの切なる願いに応えるためにも三十年、四十年という長い視点に立った全宗門的な支援の輪の広がりが期待されている。

避けたい募財の取り崩し

▽六日に開催された第二百四十一回臨時宗会（北條成之議長）で設置をみた阪神大震災対策委員会（委員長＝篁昭観総務）の宗会議員の委員による初会合が臨宗の閉幕後直ちに宗務所で開催され、今後の審議日程などを決めた。この席上で委員からは、今年度予算に対し数十億円規模の超過進納が見込まれている蓮如上人五百回遠忌の募財の一部を復興対策金庫の資金として一時流用してはどうかとの提案がなされたようだが、委員長の篁総務はこの対策については否定的。松村了昌総長も過日行なった本紙のインタビューに応じて「たとえ超過進納があっても支出の

面で当初計画額の百九十八億円を超えてはならない。なし崩し的に使うことはできない」と募財を遠忌計画以外の他目的に流用することは避けたい、との見解を示している。

真喜子ちゃんも精神的痛手

▽今回の兵庫県南部地震では、被災した子供達が地震のショックからなかなか立ち直れずに「地震」と聞くだけで顔色が真っ青に変わるなど相当大きな精神的痛手を受けていることが多く、このような被災児童の精神的なケアの問題が医学や教育の関係者らの間で次第にクローズアップされてきている。こうした子供達の精神的なショックは神戸市だけに限らず震度5を記録した京都でも同じ現象が見られるようで、大谷光真門主の二女で四月から小学校に進学する真喜子ちゃん（六つ）もあの日以来、夜になると一人で寝ることやトイレに行くことができなくなり、いつも母親の範子裏方の後を付いて歩くようになったという。七日、本山御影堂で営まれた“仏教婦人会の母”九條武子女史を偲ぶ「如月忌」法要に臨席した範子裏方は、このように身近で起こった真喜子ちゃんの地震後の精神的な変化にふれつつ、「もっと被害の大きかった地域の人達の精神的なショックは大変なものだろうと推察致します」と語り、仏教婦人会総連盟として義援金など物的支援に加え被災者への精神的面でのケアに取り組む必要性を訴えた。

新宗制絡みで渉外室置く

●**東本願寺派** 兵庫県南部地震で、明石市の西林寺（二階堂正純住職）は本堂内陣が損壊したほか、庫裏の屋根瓦が崩落するなどの被害を受けた。建築業者が公共施設の修復を優先させていることもあり、復旧には時間がかかりそうだ。門徒の被害状況は、一月二十六日から始めた月参りで確認しており、全容を把握するのに一カ月を要する見込み。震災の特別措置として、門徒およびその縁者の震災死亡者の葬儀を優先的に行ない、葬儀会場の使用料も無料にすることを考えているという。「目下のところは徐々に進むしか方法はないが、確実に復興しつつあります」と二階堂住職

▽一方、大阪市西淀川区の遍満寺（河野文麿住職）は、建物に大した被害はなく、寺族も無事だった。地元門徒の被害は少なかったが、神戸市などで家屋が倒壊した門徒が数人いた。死傷者はないもようで、河野住職はほっと胸をなで下ろしている

大本

被災者に精神的援助を

●大本本部の「兵庫県南部地震災害救援対策本部」は京都府亀岡市天恩郷の大本会館一階に置かれている。本部入口の横には対策本部が用意したコンロ、ガスボンベ、ウェットティッシュ、紙コップ、使い捨てカイロ、シャンプー、石鹸、風邪薬、乳児用ミルク、生理用品などの救援物資が積み上げられている。これら被災者にとって常用の物資は、「災害救援奉仕隊」が被災地入りする際、必ず積み込まれるとのこと。大量ではなくとも被災者が必要なものをこまめに届けられるような対応を心掛けている。救援物資の中には国際ソロプチミスト亀岡支部から寄せられた衣料品や、人類愛善会の活動の趣旨に賛同するエステー化学(株)からの物資も見られる。人類愛善会総本部では一月三十一日午後、これらの物資を車二台に積み込んで=写真、救援活動へ出発。出口眞人事務局長をはじめ物資を搬入する総本部員は、万祥殿で御祓いを受けた後、職員らの見送りをうけ雪のなか神戸市北区の「しあわせの村」へ向かった。大本・人類愛善会の両本部では今年、予定されている教主ご還暦、同会創立七十周年などの祭典、行事において祝賀ムードをおさえ、今回の震災からの復興を全力で支援していく考えだ。対策本部では今後、

物質的援助に加え、「宗教者として地震のショックの大きい被災者に精神的援助を与えていくことが必要」としている。

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)